

歴史地理学・人文地理学における 人文主義的方法論序説

—実証主義的方法論との対比—

菊 地 利 夫

- I. 歴史地理学・人文地理学の二大潮流
- II. 歴史地理学・人文地理学における方法論の革新
- III. 人文主義の論理的性格
- IV. 実証主義の論理的性格
- V. 人文主義的歴史地理学・人文地理学を強化する
行動科学・歴史心理学と解釈学
- VI. 人文主義的な歴史地理学・人文地理学の展開

I. 歴史地理学・人文地理学の二大潮流

「知識の地球儀」というたとえがある。地球儀という球体はどこからみても半球だけしか見えない。他の半球を見るには、視点を球体の正反対側におかなければならない。歴史地理学と人文地理学において完全な知識を手にいれるには、知識の球体を二つの視点から見なければならない。この二つとは、人文主義的視点と実証主義的視点である。実証主義的視点に立てば、事象を客体—ものの世界として説明するから、知識は自然的体系となる。これは自然科学である。人文主義的視点からみれば、事象を主体的—一人間中心に世界を理解するから、知識は人文的体系となる。これは人文学に属する。ものの世界には実証主義的な歴史地理学と人文地理学が成立し、人間中心の世界には人文主義的な歴史地理学・人文地理学が成立する。この二大潮流が歴史地理学と人文地理学に展開している。

従来の地理学史の多くはこの歴史的事実に目をふさぎ、実証主義的な歴史地理学と人文地理学を中心にとりあげ、人文主義的な歴史地理学と人文地理学の発達については、前者の修正論あるいは反対論に位置づけて、その系統的展開をおろそかにしてきたという誤りをおかしている。歴史地理学と人文地理学が人文的体系と自然的体系に分化したのは、唯物論的機械論がおしよせた19世紀後半からである。このときからようやく自然的体系としての実証主義的な歴史地理学と人文地理学の成長がはじまった。これに対して人文主義的な歴史地理学と人文地理学は早くも15世紀から成立していた。人文主義がルネッサンスの中心思想としてわきあがり、人文学が再生し、その一つとして人文主義的な歴史地理学と人文地理学が古代の科学から復興した。まして1950年代からはじまった地理学の革命において、にわかに入人文主義的研究があらわれたかのようにみることにもまた誤りである。過去において人文主義的研究と実証主義的研究がほぼ同じ時期に新しい局面を展開してきたことが、正しい発達史のすがたである。

この小論においては、多くの地理学史が実証主義的研究史に偏向していることを修正するために、画期的な事例のみをとりあげて、人文主義的研究を中心とし、実証主義的研究史に対比しながら、私見を述べて、人文主義的な歴史地理学と人文地理学の発達史の序説にしたいと思う。

II. 歴史地理学・人文地理学における方法論の革新

地理学は古くて新しいとよくいわれる。これは過去にいくたびか地理学の革命が行われたからである。しかし19世紀半ばから20世紀はじめまでに行われた地理学の革命と、20世紀半ばから現在も進んでいる地理学の革命がもっとも重要である。

前者においては地理学の研究対象はなにかという問題が主題であった。この対象の革命において、土地空間をあらわす用語をさまざまにとりかえた。風土・環境・分布・景観・地域・地理的複合・空間的組織・地理的システム・場所などがあげられる。これらの対象は人文主義的に、あるいは実証主義的に研究された。これに対して後者においては、方法論の革新が行われたことが特徴である。実証主義とか人文主義とか、これらは大別した方法論であるが、これらの方法論はそれぞれより深く広く掘り下げられた。現在の地理学の革命において、実証主義的方法から先がけて計量主義があらわれ、これに対して人文主義的方法として行動主義があらわれた。さらに実証主義的方法として構造主義がとりあげられて新実証主義への移行を明らかにしている。人文主義的方法として観念論的方法が主張されたり、現象学的方法が強調されている。両者の方法論はまことに多様化した。

科学の分化は対象を区別することからはじまった。大きくわけて、自然的事象・人文的事象・社会的事象とすれば、科学は自然科学・人文科学・社会科学にわけられた。次の段階には、科学を方法論から分類するようになった。同じ対象を異なる方法論から考えることができるからである。また異なる対象を共通な視点から考えることもできるからである。さらに、研究者が立つ世界観（パラダイム）が異なることによって科学が区別されるようになった。歴史地理学と人文地理学において、かつて対象論やパ

ラダイム論から地理学とは何かという主題が論じられたことはあったが、今日ほど方法論を中心として研究が開花したことはない。この方法論の多様化によって歴史地理学と人文地理学の知識体系は深まり、さらにその知識のテラ・インコギニタはますますひろく展望されるようになった。

方法論という用語には次元が異なる内容があるので、それぞれの次元にわければ、今日の方法論問題の焦点がわかりやすくなる。方法論は、科学的方法論と哲学的方法論の次元にわけられる。

科学的方法論として、対象から資料を集める「技法」の次元がある。「技法」とは観察法・聞きとり法・アンケート調査法・実験法・統計分析法などがあげられる。この「技法」によって対象についての断片的な知識を集める。「技法」は研究者が白紙の状態で見聞するのではなく、方法論のより深い次元から意識していることは言うまでもない。次に、研究者が対象世界にアプローチするしかたとして、集めた断片的な知識を整理するしかたがある。この次元の科学的方法論を「研究法」という。「研究法」には、発生的理論・機能主義・計量主義・構造主義・行動主義・解釈理論・システム理論などがあげられる。これらは大別して、人間からみた世界を考える人文主義と、ものを中心に世界を考える実証主義にわけられる。

「技法」と「研究法」を理論的に正しい方向として基礎づける論理が哲学的方法論である。新カント派の哲学が科学を個性記述の学と法則定立の学にわけ、前者を文化科学、後者を自然科学にわけた。カント哲学は、自然認識はいかにして可能かを問うて『純粹理性批判』（1781年）を著した。これに対してデュルタイは、社会・歴史を考察する人間能力の批判として「歴史的理性」を主張した。カント哲学は実証主義の理論を基礎づけたものであり、デュルタイの現象学は人文主義の理論を明らかにしたといえる。

この小論においては、方法論といっても、その全容にわたるものではなく、「研究法」の次元において述べることを中心課題とする。20世紀後半は、まさに諸科学が「研究法」の次元において方法論問題に関心を深めている。科学史家トーマス・クーンが『科学革命の構造』（1962年）を公刊して現在の諸科学の変化に対する見解を述べた。クーンの論題は次の二つに要約される。一は、論理実証主義はもはや旧科学哲学となり、いまはパラダイム論が新科学哲学になったこと、二は、科学史をみれば、知識の連続的進歩ではなく、科学者集団が底流に持つ考え方であるパラダイムの断絶的転換であるということにある。地理学の革命にもクーンの論題を一考する価値がある。それはさておき、ここでは人文主義と実証主義とはいかなる思想であるかを明らかにすることが先決問題である。

Ⅲ. 人文主義の論理的性格

人文主義の起源 人文主義とは、人間の属性である一切のものを考える立場である。この人間像は本能性・心理性・精神性を具え、理想を求めてこれを実現していくことである。この人間像を中心として世界を見る論理が人文主義である。人文主義の概念は、ローマ時代にキケロ（BC106—43）によってつくられた。キケロはギリシャ人のような生活文化を持ち、高い人生の理想を実現するために、人間はいかなることに努力しなければならないかという問題を説き、世界市民の理想を立てた。これは普遍的な人類愛を主張したのであった。これは人文主義の一つの原理である。この世界人類愛の理想は、ローマ帝国の成立に精神的支柱となった。しかしこの理想は、中世において、一方では封建社会によって抑圧され、他方では宇宙の秩序は神の意志の表現であり、人間性はこれに調和すべきであるというキリスト教神学によって圧迫されて、人文主義は萎縮せざるをえなかった。

イタリア人文主義 世界史の転換期であるルネッサンスが人文主義を再生させた。14世紀にルネッサンスはイタリアの文芸復興となり、15～16世紀に高潮期となり、アルプスをこえて西ヨーロッパに広がって宗教改革となった。ルネッサンスの中心思想は人文主義であった。しかし人文主義という用語は19世紀になってドイツにおいてはじめて使われた。それまでは人文主義者という用語のみであった。人文主義者とは人文学の研究者を指した。人文主義者は教会の束縛から「人間開放」を行い、「人間の発見」をして新しい人間像をつくりあげた。中世の禁欲・節制・謙遜などから解放され、自己への信頼、高い名誉、強い個性を持つべきであるという反抗精神を持ち、神を観想する人間より知識と技術をもって行動する人間を上位においた。人間は聖書創生記第3章第26節の解釈から神の姿と同じ姿として創造されたから、神に近づくことができるとし、神に似たしかたで感覚し、思考して行動する。そして人間より下層の動物・植物などの自然界を支配し、利用し、再組織できると考えた。人間は世界の中で自らの生き方を計画していかに実現できるか、世界をいかに変革していくことができるかなどの問題が人文主義者の課題となった。ここから新しい科学と技術が発生した。

イタリア人文主義者は人間像を変革したが、まともった人文主義の思想体系をつくるまでには至らなかった。しかしその考え方は当時の文芸作品・講演などにあらわれている。これを要約すれば次のようになる。①世界は進歩する。人間はこの進歩を推進していく能力がある。②よい気候帯に住む人間は優れた文化を発達させる。③世界の人類が持つ性質は同じであるが、その発達には遅速があるなどである。イタリア人文主義は生活的・具体的な「全体的人間像」を考えていた。

ドイツ人文主義 人文主義は疾風怒涛時代の思想が人間性の解放に影響し、啓蒙思想の洗礼をうけて、

人間像を抽象化した。ドイツ人文主義の人間像は啓蒙思想の合理性によって、理性的・自律的であった。この立場によって、カント（1724—1804年）、レッシング（1729—81年）やフィフテ（1712—1813年）などは観念論を唱えた。カントは人間を世界のあらゆるものの中心におき、これを「コペルニクスの転向」と自称した。世界はさまざまな個性的・特殊なものから成立しているが、それはさまざまな条件によって現われた普遍性であると述べた。ゲーテ（1749—1832年）やフンボルト（1767—1835年）は人間の尊厳が中心思想であった。ゲーテは、人間自身の中に世界に対する形成力を持ち、世界を発展させていくことを強調した。ヘルデル（1744—1803年）は『人類の歴史哲学の理念』（1791年）を著し、諸民族の歴史は個性的に異なる出発点からはじまるが、一つの大きな目標すなわち人間の普遍性に到達すると述べ、さらに人間は感性的・直観的・理性的であり、これらを矛盾なくむすびつけることができるのは、人間の持つ構想力であると考へた。ヘルデルは人間像に強い抽象化をしていない。ディルタイ（1833—1911年）の生の哲学においては、その人間像は全人間性を主張した。19世紀末から20世紀はじめに、あまりにも人間像についての見解が多いので、マックスシェラー（1874—1925年）がこの時代ほど多様な人間像を主張されたことがないと嘆いたほどであった。

現代の人文主義——要約と批判—— 人文主義は人間を中心にして世界を見る立場であり、その思想の中心に人間像の見解がある。現代の人文主義は歴史的経過の中で洗練されながら、一貫してつらぬいている理念がある。これを要約すれば次のようになる。

(1)人文主義の内容はそれぞれの時代に生じた要素を加えて発展するが、それもやがて人間性を束縛するようになる。そうなればまたその束縛から解放して新時代の人間像を形成する。人文主義は「人間の

解放」という行動を一貫してつらぬき、「人間の再生」の行動をおこしている。

(2)人文主義はその中心に新しい人間像の形成の論理がある。それは単なる理念にとどまらず、行動の立場が重要視される。人文主義は観想的だけではなく、行動的である。そのためには人間の主体性が強調される。

(3)人文主義は新しい生活文化の形態をつねに求めている。そのときに人文主義は古代的な形式を復活する傾向があらわれる。これは伝統を尊重するからである。人文主義は伝統と創造が闘争してその中から新しい創造を生成している。

(4)人文主義は個性を重視し、人類の斉一性を肯定している。世界の人類はそれぞれの民族文化を形成し、多様な民族文化をつつみこんでいる世界文化を実現しようとしている。

(5)人文主義は人間像を、理性的人間と創作の人間の統一体と考へる。この統一ができるのは人間の構想力によってである。

人文主義に対する批判論は、当然のことながら実証主義者から投げかけられる。①カントの哲学的人間像に批判が集中している。カントはコペルニクスの転回と自称して、人間は世界の中心にあるとした。ここから人間中心主義、観念論あるいはヒューマニズムなどの思想が生れた。そのため、②人間概念は時代をこえた普遍性に重点をおきすぎる。人間性は歴史的・相対的である面をも重視しなければならない。③人文主義の人間像は人間の自律性または自由意志を強調しすぎる。人間像は風土・社会制度・歴史に拘束されている側面を考へなければならない、などである。

IV. 実証主義の論理的性格

実証主義は人文主義にくらべると、その起源は新しく、その論理の形成は18世紀半ばからである。実証主義はイギリスが先頭になって西ヨーロッパ諸国

が産業革命をおしすすめていく過程に発生し、自然科学の自然的体系をつくりあげた。この時代的背景は、実証主義の底にある世界観の基本的な性格をつくった。実証主義は次のような3段階の発達にわけられる。18世紀半ばからのコント・スペンサーの古典的実証主義、19世紀末のマッハの実証主義、20世紀はじめからの新（論理）実証主義である。

(1) コント・スペンサーの古典実証主義

コント（1778—1857年）は『実証精神論』（1844年）や『実証哲学講義』4巻（1830～42年）を著して、実証主義の論理をはじめ体系的に述べた。自然や社会を研究するには、その対象を自然や社会の表面的な諸事象だけに限る。これらの個々の諸事象は観察などによって人間の感覚や経験によって直接に手にいられるものであり、これが実証的事象である。実証主義はこれらの諸事象間の関連のみに限って探究する。実証主義は経験的事象のみを対象とし、諸事象に内在する本質とか、諸事象の本源の原因などは形而上学の問題である。観察によって得られた諸事象間にある関係は法則である。法則には二つのタイプがある。一は空間に同時に存在する諸事象における共通性であり、他は時間的に継起する諸事象の系統性である。かくて実証主義の特色とは、空想的に対する現実的であり、対象は観察した事象であるから曖昧に対する正確である。また人間の本质などの研究は無用であり、人生に有用な研究をなすべきであり、法則は次々と新しく考えられるから、絶対的に対する相対的であることなどである。

スペンサー（1820—1903年）は科学と宗教を和解させた。諸事象の背後にある存在は科学にとって不可知であり、それを考えるのは宗教であるとし、科学は現実のシンボルを考えることを強調した。スペンサーはダーウィンの進化論の影響をうけて社会有機体を提唱した。これは社会が多くの器官に分化し、それぞれの機能が相互関係を強めて均衡をめざして

いく過程をすすむ。これが社会の進化である。適者生存によって生存競争から脱落したものは排除されるという社会ダーウィニズムを主張した。かくて実証主義はそのころのイギリスの資本主義と植民地政策を正当化した論理という性格を持つようになった。

(2) マッハの実証主義

マッハ（1838—1916年）の思想、いわゆるマッハ主義が実証主義の自然的体系の理論を強化した。マッハの二つの考え方が重要である。一は世界要素論である。世界は色・香・音・温冷・時間・空間などの感覚的複合であり、世界はこれらの依存関係から成立している。科学はこの感覚的複合と依存関係を記述することに限るべきである。唯物論・観念論・自我論や実体論などは形而上学の問題である。意識から独立している客観的実在という概念は主観的に考えてつくったもので科学の対象ではない。二は思考の経済である。世界の諸要素とその関係を記述する方法は最小の労力で行うべきである。それには数学的定式がよい。そのために諸要素の質を量に還元してこれを関数関係をもって示すことである。これが諸事象の研究における精密化・科学化である。マッハ主義は具体的な現実を抽象化し、量化できない質的な事象を除外し単純化することによって、実証主義が自然的体系として知識を整序するに大きな役割を果たした。

(3) 新実証主義

実証主義は経験主義とマッハ主義と記号論が結びついて新実証主義に発展した。20世紀の半ばから、現実の表層における諸要素の集合には表層構造が認められる。その下層には表層構造を通約する公分母があって深層構造となっている。表層と下層が関連して全体の構造をつくっている。表層構造はさまざまに多様な姿態を示しているが、これらを論理的に操作して単純化し、これを組みあわせれば普遍的な

超構造（深層構造）に行きつくことができる。それはさまざまな表層構造に共通性があるからである。表層構造は深層構造の一部が偏倚したものであり、深層構造は表層構造が持っている共通性を統合して均衡がとれるように存在している。レヴィ・ストロースは『構造言語学』（1958年）を著してその方法論を構造主義とよんだ。

構造主義はストロースによれば、異なるさまざまな文化はそれぞれの表層構造を示しているが、その深層構造は普遍的な形式となる。これは知的に構成された演繹モデルである。これを記号体系におきかえたり、数学的体系で示したりすることができる。

かような構造は実在か仮構かという議論が対立している。ストロースは実在説を主張している。またストロースの構造は共時的・静態的であり、いわば構造分析論である。同じ実在説でも、構造の発生する過程を重視する人もいる。ギュルヴィチ(1955年)の構造発生論である。これは変化する歴史的世界を考えると、変動によってもアイデンティティを失わない絶対的な実在であるという。今日では構造主義は第二世代が第一世代の理論を検討する時代になっている。第二世代は、経験的な表層構造に対して抽象的な深層構造はいかなる関係にあるかを問題にしている。その結論は、表面的な事象の表層構造を表面下の深層構造によって説明することである。また構造の分析論と発生論を統合しようとしている。すなわち構造は構成されることによって実在的であり、前の構造から後の構造に移行しているのであるから、発生的・動態的に構成されていく過程があり、この過程において構造をとらえることが研究の重点であるとする。

(4) 実証主義に対する批判

実証主義の論理はさまざまな批判をうけているが、人文主義の人々からの批判は好意的ではない。①実証主義は現実の多様性をあまりにも単純化・抽象化

するばかりでなく、量的に還元できない質的なものを無視している。②実証主義は自然科学として知識を自然的体系にまとめることに成功している。しかしその論理を人間・社会・歴史などの諸事象の研究にも積極的に採用しようとすることは根本的な誤りをおかすことになる。人間行為と自然的事象は明らかに異なるものであり、自然科学は人間に関する科学にふさわしいモデルを提供することはできない。人間の行為の叙述はその行為をなす主体の観点からとらえて解釈・理解しなければならない。知識の自然的体系と人文的体系とは別なもので、これを自然的体系でまとめあげようとする統一科学という主張はいきすぎである。

V. 人文主義的歴史地理学・人文地理学を強化する行動科学・歴史心理学と解釈学

(1) 行動科学

人文主義における人間像はあまりにも哲学的人間像であるので、歴史地理学と人文地理学に適切な人間像までには隔たりが大きい。人文主義的な諸科学が人間中心に世界を考えるためには、哲学的人間像より具体的な人間像を確立しなければならない。その一つはアメリカに成立した行動科学がその要請に応えられるだろう。

行動科学はR. リントンが『世界的危機における人間科学』（1945年）で学際的に人間像と人間行動の特性の研究を発想した。またJ. ギリンの『人間科学の展開』（1949年）も同じような研究をめざした。これらの人間の科学が行動科学という名称に統一されたのは、心理学者J. G. ミラーの論文「行動科学の一般理論をめざして」（1949年）からである。行動科学はこれから3段階の発展をした。行動科学の定義は「人間の行動について客観的な方法で収集した経験的な資料によって立証された一般法則を確立し、人間行動を科学的に説明し、予測すること」とされた。はじめに行動科学は実証主義的科学の方

向にすすんだ。これが古典的な定義である。この段階の例として、行動主義心理学者の J. B. ワトソンの考え方があげられよう。ワトソンは人間行動を、が環境の刺激—人間の反応の過程（S—R方式）という機械論をもって説明している。

第2段階としては、新行動主義が1940年代からあらわれた。環境の刺激は生活体の欲求・習慣に選択されてうけいられるとして、S—R方式がS—O—R方式の理論にかわった。この段階でも本能・意識・精神などは考えられていない。しかし人間の行動パターンが成立するためには条件反射・動機づけ・学習などによることを打ちだしている。かくて人間のパーソナリティを形成すると考えた。しかし最大の欠陥は、意識や思考の内部構造やイメージの世界が理論から拒否されていることであった。この段階では自然的現象と人間・社会の特性が異なることを考えている。この技法として社会統計調査法や心理測定法が用いられ、多変量分析の理論が使われて消費者行動の分析などが研究された。

第3段階にすすんだ。情報科学やサイバネティックなどの理論から援助された。人間は目的を持って、情報を処理したり、組織づけながら、意志決定を行わない、自己と環境を制御して組織していく人間像をつくりだした。これは物理的空間に対して生活空間をつくることを意味している。かくて人間像のブラック・ボックスであった内部の構造と機能をホワイト・ボックスにとりかえた。新行動主義は意識・イメージ・精神の価値判断・意志決定などを解明できるようになった。

行動科学は人間の科学の基礎論を革新した。とくに人間像として、近代の自然法思想や理性概念や機械論・進化論と結びついている決定論などの考え方を否定して、情報・制御・計画などの基本概念をもつシステム工学的に制御できるシステムとしての新しい人間像・社会像に移ることができた。これは主体的人間像への転換であった。かくて行動科学は

実証主義と人文主義にまたがる研究方法をつくりあげた。行動科学の成果を用いて、行動的環境論が古くからの環境論にかわって、行動主義の歴史地理学・人文地理学が新しい発展をしはじめた。カント哲学による絶対空間の地理的環境をまったく塗りかえてしまった。

(2) 歴史心理学

歴史地理学は同じ空間に現在の地理とは異なる過去の地理がいくたびもあらわれたことを研究している。また人文地理学は広大な空間においてさまざまな人間集団がそれぞれの地域・景観をつくりあげていることを研究している。この事実は、人間が形成力として、時代により、所によって地表に作用する心的構造が異なっていることを示している。人間の心的構造は知覚・イメージ・思考・習慣・信念などからなる。人間の心的構造は時代によって異なっていることを研究すれば、これは歴史心理学であり、場所によって異なることを研究すれば、これは民族心理学となる。歴史心理学の起源は、民族心理学の W. ヴント（1832—1920年）や哲学者ディルタイや歴史学者 K. G. ランプレヒト（1856—1915年）などの19世紀までにもさかのぼる。しかし歴史心理学という用語を用いたのは、1898年に哲学者 H. ベルトと H. リッカート（1863—1936年）である。そして歴史心理学の体系をつくったのは Z. バルブで1960年代である。

一般心理学は古い科学であり、ルネッサンスの人文主義の復活にもなって生れた。しかし心理学が発達したのは、実証主義的な法則定立をめざす自然科学としてであった。心理学は、時空を抽象した次元において心理的事象を状況的アプローチから研究した。心理的事象は同時に、ある状況に含まれている諸要素から説明された。その説明は諸要素を量的に還元して人間行動についての数学的モデルをつくり、人間行動を予測しようとしている。人間心理の

構造と過程について、歴史の変数も空間の変数も考えない普遍的モデルを構想している。したがって一般心理学には、過去の時代別の人々の心理はいかなる特色があり、居住地によって人々の心理はいかに異なっているかを研究しようということはなかった。

しかし人文主義的な諸科学は、それぞれの分野から歴史心理学や民族心理学を開拓した。人文地理学ではJ.ブリュンヌが『人文地理学』（1912年）に、心理主義といわれるほどに人間心理を基礎とした理論を立てた。彼は「人間はある欲求を充足しようとして、本能あるいは伝統的暗示にしたがって行動する人間によって成立している地理的事をとりだして研究する」と主張した。社会学は1930年代から歴史心理学を導入して、文化とパーソナリティの研究をはじめた。人間行為は現在の状況が決定的原因であるが、その前に人々の生活史から観察する必要があると考えるようになったからである。歴史学が歴史心理学を重んじて両者の交流をはじめたのは1930年代からである。そのころから歴史的事象の意味や人間行動の動機などを考えて、歴史的事象を解釈して過去を理解しようとしたからである。

Z.バルブの歴史心理の定義は、集団の行動の根底すなわち情動のパターン・知覚・思考様式・環境を組織する行動などの基礎に横たわっている持続的な精神的性向であるとした。歴史心理とは、それぞれの時代の人間行動の発生装置である。歴史心理学にとって過去の人文的事象は、歴史心理を研究する巨大な実験室である。さらに歴史心理学は、歴史における人間行動を予測する理論をも開拓しようとしている。人間の心的構造が展開してきた過程を明らかにすれば、現在において将来の望ましい心的構造をつくる方向を探しだすことができるであろう。そうならば歴史心理学は過去を解釈する科学であるとともに、現在を変革する方向を考える科学にもなりうる。しかし歴史心理学は、いまだ時代別の人々の心理を系統的に明らかにするまでにはなっていない

若い科学である。時代別の歴史心理がわかっているれば、その時代の事象を解釈・理解しやすい。陰陽五行思想という古代人の心理がわかっているから、古代の都市の立地選定や年中行事など断片的な過去の文献・記録や遺物・遺跡や民俗などを一つの文脈の中において全体を復原することができる。

(3) 解釈学

行動科学は心的構造と機能を明らかにし、歴史心理学は心的構造の時代別の特色を具体的にとらえる。この心的構造を持つ人間集団が地表に表現した景観や地域にはいかなる意味があるのかということが理解できれば、歴史地理学と人文地理学の研究は目的をなしとげることが容易になる。この役目を果たするのは解釈学である。人文主義的研究は行動科学と歴史心理学と解釈学をもって、研究法が完成されている。解釈学(Hermeneutik)はギリシャ神話のヘルメス神を語源としている。この神は無形なものを有形にし、神々の考えを感覚でわかる事象に表現する力を持っている。ヘルメス神は人々にわからせる働きと相手をわかる働きの二つの力を持っているが、解釈学は相手をわかる働きの論理を傾けてつくりあげている。

解釈学はジャムバチスタ・ヴィコ(1596—1650年)にはじまる。彼はデカルトの自然科学的方法とは異なる歴史科学の方法をうちだして、人々の表現した諸事象を理解しようとした。解釈学が体系化されたのは、A.ベック(1785—1867年)によって19世紀になってからである。諸事象が表現している人間精神をわかることを理解するというが、解釈学は理解するための技術的手段である。はじめ解釈学は過去の文芸・造形美術の作品、法律の原典や宗教の仏典などの理解にあったが、しだいにその対象は記号・生活道具・記念碑・遺物・遺跡や景観など、すべて人間精神によって生産されたものにまでひろげられた。かくて解釈学は人文主義的な諸科学の研究法と

してひろく導入されてきた。

19世紀末、歴史学は解釈学の導入によって事実史からぬけだして近代化した。G. ドロイゼン（1808—84年）は『史学要綱』（1867年）に解釈学をとりいれ、E. ベルンハイム（1850—1942年）は『史学方法と歴史哲学』（1903年）を著し、史学方法論を史料発見・批判・解釈・叙述の4段階にわけた。

哲学に解釈学を導入したのはW. デルタイ（1833—1914年）である。人間が生を体験を表現したものを解釈・理解することについて主張した。デルタイの解釈学的方法を現象学にとりいれたのはM. ハイデッカー（1889—1961年）であり、ここに解釈学的現象学という生の哲学が成立した。生の哲学が、新カント派の哲学が衰えていく傾向にかわって現代哲学の主流となった。

社会学においては、M. ウェーバー（1864—1920年）が理解社会学を、W. ゾンバルト（1863—1941年）が理解経済学を確立した。これらは解釈学的現象学の他者理解という概念を導入した人文主義的な社会学・経済学であった。しかしこの二人はいまだ新カント派のリッカートの影響から脱しきれなかった。彼等の理解の方法では、日常的な生の世界における体験は具体的事象に表現されるが、その表現は表層構造であり、その深層に理念型（ウェーバー）、合理的図式（ゾンバルト）などが深層構造として存在していると考えた。これは実証主義がいう理想的なモデルであり、人文主義的研究とは言い難い。20世紀半ばから、文化人類学が事実の収集・整理の段階から解釈学を導入した研究段階に入り、歴史地理学や人文地理学にも解釈学的現象学が研究法としてとりいれられた。

理解と認識は考え方の二つの方向である。認識は研究者が事象を外から客体として観察し、これを説明する。認識と説明は自然的体系の知識をつくり、自然科学の方法論であり、実証主義である。これに対して研究者は人間行為によって表現された事象を

テキストとして読解し、解釈して理解する。この解釈と理解は人文的体系の知識をつくり、文化科学の方法論であり、人文主義的である。

解釈学の技術はテキストの読解であり、解釈とは他者理解である。テキストの読解は部分から読解して全体の意味をとらえるように進行する。また全体の文脈からわからない部分を解明する方向にも進行する。テキストを読解して他者理解できることは、感情移入することではない。読解者と他者が経験という共通性——歴史心理など——を持っているから、他者の表現を解釈できるのである。古い解釈学においては、読解は先入見を無くして対象に直面すべきであるとした。今日では読解者自身が実践の立場における問題意識や価値感を持たなければ、対象の中のわかる意味もわからなくなると考えている。読解とは研究者と表現との出会いである。解釈学に対する批判がある。読解には終点がなく、テキスト以外のものをも読解していることがある。これに対して読解の終点として理念型や合理的図式を考えることは、構造主義の深層構造にいきつくという実証主義となる。解釈学は表現についてどこまでも読解していくことである。また読解は他の別のテキストにまで読解が入りこんでいく場合がある。これに対して読解は種々のテキストとの間に読解が入り組んでひろがることはありうる。しかし因果関係はどこまでも追求せず、それぞれの科学の中に限界を設けるように、読解も科学ごとにテキストの範囲を守るべきであろう。読解には永遠の自明な公理がないから、読解はどれにもつねに疑問符をつけることができるから、他の読解にとって替えることができる。これに対して読解に時代的変化があるのは、読解者のその時代の自己理解に依存しているからである。実証主義の法則も絶対的ではなく、相対的である。解釈は歴史的に規定されているものである。可能な解釈はいくつもあるが、ある解釈は他の解釈より基本的であるという条件をみればよいのである。

VI. 人文主義的な歴史地理学・人文地理学の展開

(1) 人文主義と実証主義の未分化の段階

ルネッサンス期に人文主義によって古代の人文主義的な地理学が復興された。それはギリシャのプトレマウス（AD 2世紀）の著『地理学入門』のラテン語訳が行われて、人文主義者の間に普及したことから始まる。15世紀にイタリア人文主義者の『神曲』で有名なダンテや教会枢機官であったダイーなどが地理学を著しているが、それらはプトレマウスの著書からの引用が多かった。16世紀の地理学はコスモグラフィアとよばれた。これは大航海・新大陸探検の時代で世界各地から新発見が西ヨーロッパに集まり、この資料の整理であった。この中でもS. ミュンスター（1489—1552年）の『世界誌』（1544年）は、17世紀半ばまで48版を重ね、6カ国語の訳本が刊行された。17世紀になると地理学は体系を整えるようになった。B. ワレニウス（1622—50年）が『一般地理学』（1650年）と特殊地理学にわけた。『一般地理学』について、物理学者のニュートン（1642—1727年）や生態学者のフンボルト（1769—1858年）はこの著書に高い評価をあたえた。

方法論からみれば、哲学者カントの著『自然地理学』（1802年）をまずとりあげなければならない。カントがケーニヒベルク大学において1755～96年まで地理学を講義した成果がこの著書である。これには、人間の思想・感情・宗教などは居住地によって異なることが述べられている。その内容の半ば以上はワレニウスの著書からの引用である。

カントは哲学において世界を支配する神を追放して人間中心に世界を考える立場を確立し、これをコペルニクスの転回と自称した人文主義者である。しかしカントは、地理学における最重要概念である時空間問題については、実証主義概念である絶対空間と絶対時間を導入した。絶対空間は時間性がなく、人

文的・自然的な諸事象の入れものであり、この中で諸事象は因果関係に結合して場所によって異なると述べている。カントの時空概念はすでに数十年前に成立したニュートン物理学からとり入れたものである。カントが人文主義者として徹底するならば、何故に早くからライプニッツ（1646—1716年）が主張している人文主義的な時空概念としての相対的空間と相対的時間をとりいれなかったのか。人文主義者としての大哲学者の誤った理論上の混乱が惜まれる。

ドイツ近代地理学の父といわれるC. リッター（1779—1859年）は40年間もベルリン大学の地理学教授であり、人文主義者であった。彼は『地理学——自然と人類との関係』（1817年）や『世界地誌』（20巻）を1822—59年に刊行した。彼は、諸事象を多くの記録から博引傍証して、諸大陸で観察した資料を帰納法でまとめ、絶対空間における自然と人間の諸事象について因果関係を考え、その法則を求めようとした。リッターの方法はこのころ活躍したコントの実証主義の影響を強くうけている。しかしリッターの講義と著述の核心は、宇宙における地球の特性、人間居住地としての諸大陸の特性、人類の愛護者としての大地であり、諸大陸に展開する世界史の表現は神聖な神の世界計画であるという中世的目的論を情熱をこめて説得しようとした歴史地理学であった。リッター地理学は——カント地理学においてみたように——対象は人文主義的であり、方法は実証主義的であるというように、理論体系に不徹底さがあり、人文主義と実証主義とが未分化な段階の位置にあった。

(2) 地理学における二大潮流の形成

人文主義的研究と実証主義的研究が方法論の異なる二大潮流となるのは19世紀半ばをすぎたからである。この時期は機械論的唯物論が流行した。世界の全過程は必然的な因果法則によって生起するとして目的論を排し、人間的事象は自然的事象と同じよう

に原子の集合とその運動であると考えた。世界を支配する地位から人間を追放して、その座に自然を据えた。多くの自然科学が成立し、地理学においては自然地理学の諸分野が発達した。人間の事象は偶然性が多いとして、自然的事象と因果関係にある事象のみがわずかに研究された。

この時期にダーウィンの『種の起源』(1859年)が出版された。この進化論は19世紀末から20世紀にかけて地理学に強く影響をおよぼした。進化論をつくっている考え方の中に、地理学のある分野に特に強く影響しているものがある。時を通しての進化は地形学・生態学に、環境と人間との関係は歴史地理学・人文地理学に、適者生存は政治地理学に著しい。突然変異はどの分野にもとりいれられていない。歴史地理学と人文地理学はこのような時代思想の洗礼をうけて、人文主義的研究と実証主義的研究が道を異にして進んだ。両者が飛躍的に発達した時期は同じであった。

19世紀末から20世紀はじめに実証主義的研究も人文主義的研究も、まず環境論をとりあげた。その中でも、F.ラッツェル(1844—1940年)の『人類地理学——歴史への地理学の適用』(1882年)とP.ブラーシュ(1845—1918年)の遺稿『人文地理学』(1922年)は、人類と自然との関係を主題とした環境論の中ですぐれた位置にある。一般的に、ラッツェルは環境決定論者であり、ブラーシュはこの修正論である環境可能論者であるとレッテルをはりつけることは保留しなければならない。両者の対象は環境であるが、方法論からみればラッツェルは実証主義的であり、ブラーシュは人文主義的である。実証主義的な環境論は地的束縛性を強調し、自然が人類に作用することを主張するが、人文主義的な環境論は生活様式をもつ人間集団が自然を改変することを主張する。方法論のちがいが、当然のことながら、両者において論理の出発点が逆になっている。

とりわけラッツェルもブラーシュも人文地理学を

生物学的方法を土台として建設したと口をそろえていうことに注目しなければならない。まことに生物学の地理学への影響は強く、当時は人間像を生物全体に共通である性格において考え、人間に特有な心理的・理性的な性格を考えていないことは興味深い。また両者が土台とした生物学は著しく異質であることに注意がひかれる。

ラッツェルの生物学的方法とは、ダーウィン主義の影響を受けたE. H. ヘッケル(1834—1919年)の生物生理学である。ヘッケルの生物学とは植物体と環境とが新陳代謝する関係の研究であり、ラッツェルはそのまま人類と環境との関係としている。一方、ブラーシュは同時代に活躍しているA. F. W. シンパーの群落生態学を土台としている。群落が生活形を持ち、遷移するにしたがって群落が立地する環境を改変するという論理である。ブラーシュの論理は、生活様式を持つ人間集団が環境を改変する営力であるという論理である。ブラーシュの生物学的基礎から人間的基礎に高めたのは、J. プリュンス(1860—1930年)の『人文地理学』(1910年)であった。プリュンスは人間集団の心理的層に基礎をおいて人文主義的方法をおしすすめた。

(3) 景観論と地域論

歴史地理学・人文地理学の研究は、自然と人間との関係という際限のない対象から、景観あるいは地域という限定された対象になるのは20世紀に入ってからである。かつて環境論においてブラーシュとラッツェルという二大巨峯が対立した状態が再現された。それは人文主義的なO. シュリューター(1872—1959年)の景観論と、実証主義的なA. ヘットナー(1859—1941年)の地域論である。

ヘットナーの方法論は彼の主宰する地理学雑誌(1895—1941年)に連載した論文をまとめた『地理学——その歴史と本質と方法』(1927年)に収められている。シュリューターの方法論は34歳にして教

授資格試験に講演した内容に加筆した『人文地理学の目的』(1906年)や1928年のベルリン地学協会創立100周年記念の特集号に述べた「文化景観の形態学」などにみられる。両者は同じ時期に対立して論争をしたことはいうまでもない。シュリューターは『人文地理学の目的』の末尾に「リッターの立場はヘルダーにあり、フンボルトはゲーテと結びつき、カント・ヘルダー・ゲーテは地理学史の中で注目すべき地位にある」と人文主義思想を高らかにうたいあげて、彼の研究系譜を明らかにしている。

シュリューターの文化景観とは、ヘットナーの地域が地表に関係するものとしているのに対して、地表に属するもの、人間が地表に創造したものであるとし、その形成要因は、ヘットナーの主張する自然ではなく、人間の意図目的であって自然はこれに対する制約条件であるとする。景観の叙述は単なる時間的過程ではなく、時間を克服してくりかえして発生する性格を重視した発生過程を中心とする。それはヘットナーの時の断面に復原した地域性とは異なるものである。

このころディルタイの現象学が諸科学に影響を与えて理解の方法がひろまっていた。しかしシュリューターの人文主義的方法論はそこまで進まず、次代の人々に待つことになる。E. パンゼ(1885—1953年)の著『地理学の諸問題』(1932年)は、すべての民族と文明はその創造的能力をもって景観を通して精神を表現していることを主張した。1949年にはH. ボベックが景観形成において民族的勢力がその起源に関係があると述べ、1951年にはM. シュプントが景観は精神を表現している形態であると主張するようになった。他方ではこれらの人文主義的な景観形態学に対して、実証主義的な景観類型学・景観分析学・景観生態学などがあらわれた。

アメリカ合衆国においても、人文主義的な景観論地理学と実証主義的な地域論地理学が並んで発展した。それは『文化景観の形態学』(1926年)を著し

たC. O. サウアーの『歴史地理学の将来』(1941年)と、地域論地理学のR. ハーツホーンの著『地理学の性格』(1934年)がその好例であろう。サウアーはこの著で、景観の研究法として「過去の居住者の目をもってその土地を見、過去の居住者の欲求と能力の観点からその土地を見なければならない。研究される時代と文化集団の立場に自己をおくことが、あらゆる地理学の研究においてももっとも必要である。現代と性格が異なり、時代の異なる文化を見透して内面から知ることは成果が大きい」と述べている。これはシュリューターの見解を大きく前進させて、ディルタイの解釈学的現象学を強く導入しているサウアー学派といわれた人文主義的景観論の確立であった。

これに対して実証主義的景観論も流行した。D. ウィトレシーは1929年、以後の景観は以前の景観と因果関係があるという占居系列を提案し、D. ドッジは1931年に占居系列法という文化景観の系列化の理論をつくった。

実証主義的な地域論はヘットナーやハーツホーンによって方法論の体系化が行われたが、それは古典的実証主義の段階にとどまっている。ヘットナーは新カント派の科学論の刺激をうけた。それまでの自然地理学と人文地理学の二元性を地誌学の地域によって統一し、地域性を持つ特殊地域とその共通性を示す類型地域を研究する個性記述の科学・類型科学とし、法則定立の科学の性格を軽視した。地域性とは、その叙述図式が、はじめに自然を述べ、次に自然に関係ある人文事象を述べ、最後にその人文事象に関係ある他の人文事象に及ぶという段階的統合であった。

ハーツホーンの『地理学の性格』は、アメリカの古典実証主義的地理学の理論としては最高水準である。彼はヘットナーの後継者である。彼は地域性を研究する地誌学と地域差を研究する系統地理学について、後者は前者の手段であり、前者は地理学の王

冠であるとした。地域差によって地域構造が明らかになり、地表面は地域性をもつ地域の集合体であると考えた。彼は、地域は地表を人為的に区画したもとのとして非実在説を主張し、地域実在説と対立している。実証主義的研究には地域区分法は重要問題であるが、生物学の分類が種一属一科一目一綱一門と下位から上位に向かって共通性に注目して階級区分するのはちがいが、大区画の空間を特異性に注目して区画を分割していき、あまりにも細分化する欠陥がある。また地域の境界決定は人為的操作するが、そのための議論は果てしもなくつついている。

(4) 主体論的研究と客体論的研究

多くの科学は1950年代からパラダイムをとり替えて大きく発達した。地理学の革命もその中の一つである。人文主義も実証主義もその方法論上の思想は豊かになってきたが、地理学はいつまでも古典的な段階にとどまったままで、他の科学のように前進しなかった。しかし地理学の革命によって一挙におくれをとりかえし、近代地理学から現代地理学（新地理学）に移行した。

古典的実証主義は1930年代ころ定性的研究から定量的研究に移り、計量地理学といわれ、1950年代からマッハ主義が導入されて地域性を関数定式で示し、特殊性より多くの地域にあてはまる普遍的法則を求めようになって理論地理学と称した。そのために現実の地表面を均質に抽象化し、地域の骨組みだけをとりだしたモデル理論をつくった。さらに進んで論理実証主義をとりいれ、これに記号論をもって構造主義に替えた。地表面の地域構造は表層構造であり、その下層にかくれている法則の深層構造があり、それこそ法則であり、これを記号で示すことができると考えた。論理実証主義的研究は高度に抽象化されて、人間不在のものの地理学となった。これに対して地理学は法則定立の科学ではなくて法則使用の科学であるとの見解の対立も生じた。

人文主義的研究は場所の科学といい、場所を形成する営力としての人間像を新しくした。1944年、J. K. ライトの『未知の大陸——地理学における知覚の地位』は行動科学の人間像を導入した。また地理的事象は背後に歴史的理性があるという観念論的研究も成立している。さらに感情・心理・理性を持つ全体的人間が目的を持って表現した地理的事象を解釈する現象学的研究も発展している。

歴史地理学・人文地理学の対象は環境・地域・景観・場所などという空間であり、人文主義的にも実証主義的にも研究されている。その方法論からみればまったく異質的である。研究者が対象を外部から観察して認識する実証主義的方法是、空間の中にある客体と客体との関係一客観的世界としての研究である。これに対して人文主義的研究は主体と主体との関係の研究である。研究者は場所に住む人々の感情・心理・習慣・思想・目的を知ることによって同じ生活世界に入りこみ、その人々の体験・行為によって表現・創造された場所を解釈・理解する。研究者の主体性と表現・創造した人々の主体性が話し合って他者理解する。場所を表現・創造した生活者の立場を知ること、研究者が場所を形成した生活者として参加していることになる。行動主義研究においては他者はいかなる環境イメージ（行動的環境）を持って空間行動をした場所であるかを明らかにする。観念論的研究においては表現・創造した場所の背後には人々のいかなる歴史的理性があったかを考える。現象学的研究においては表現・創造した場所を全人間性の生活体験から読解して解釈・理解する。

人文主義的方法是人間を中心としてみた世界の地理を研究する。実証主義的方法是ものの相互関係の世界の地理を研究する。現代地理学は知識のテラ・インコギニタに探検をはじめたばかりである。それぞれの行く道筋を明確にして前進すべきである。いたずらに折衷論におちいることは出口のない迷路に入りこむだけである。